社会福祉法人創思苑

２０２０年度 事業報告

２０２０年度
社会福祉法人創思苑　事業報告　目次

１　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・２

２　創思苑概要・・・・・・・・・・・・・・６

３　リスクマネジメント委員会報告・・・９

４　パンジーメディア・・・・・・・・・１０

５　当事者活動支援・・・・・・・・・・１４

６　部門別事業報告・・・・・・・・・・１７

１　はじめに

始まりはピープルファースト　そしてパンジーメディアへ

理事長　林淑美

■津久井やまゆり園事件について、当事者からの発信

「２０１６年７月、津久井やまゆり園で１９名の仲間が殺されたことに、私たちはとても大きなショックを受けました。

２か月後に横浜で開かれたピープルファースト全国大会で、１０００人を超える参加者と「こんな事件が二度と起きないように、差別のない社会を作っていきたい」と話し合いました。

今、植松被告の裁判が開かれています。でも報道されるのは、植松被告や家族の話ばかりです。津久井やまゆり園の仲間がどう思っているのかが報道をされていません。

私たちは、今は施設を出て地域で暮すことができているけれど、津久井やまゆり園や、全国の入所施設にいる仲間たちも、地域で暮せるようになってほしい。

その思いが集まり、今日、記者会見を開くことになりました。どうか、私たち当事者の話を聞いてください。」（抜粋）

２０２０年２月２０日、ピープルファーストジャパンの人たちが開いた記者会見での、会長の中山千秋さんが冒頭に語った言葉です。

■なぜ、発信する必要があるのか？

知的障害を持つ人が、自分の思いや考えを発信する機会は、これまでほとんどありませんでした。津久井やまゆり園の事件でも当事者の声は、ほとんど聞かれませんでした。同じような事件を起こさないために何が必要なのか。まずは、当事者の声を聴くことから始まるのではないでしょうか。知的障害者の当事者運動であるピープルファースト。そして、２０１６年に始まった知的障害者が主体のパンジーメディアの発信。この二つが何を目指し、社会の人たちに何を伝えたいのかを語ります。

■始まりは、ピープルファースト

ピープルファースト、「私たちも一人の人間」という考えが最初に生まれたのは、およそ半世紀前でした。１９７４年、アメリカのオレゴン州で、知的障害を持つ人が集る計画があり、その準備をしている会議で、一人の知的障害者が、「私も一人の人間（パーソンファースト）として扱われたい」と発言しました。そして５６０人が参加して１０月に開かれた集会で、参加者が初めて「ピープルファースト」の言葉を使ったのです。「ピープルファースト（私たちも一人の人間）」。この想いに共感した参加者によって、活動はアメリカ、カナダに広がりました。

日本の知的障害者が、ピープルファーストを実際に体験したのは、オレゴンの集会から２０年も後

でした。１９９３年、カナダで開かれたピープルファースト大会に参加した人たちが、翌年１０月には全国知的障害者交流集会を大阪で開きます。全国から集まった１００人の知的障害者がピープルファーストの考え方に共感したのです。そして、活動が全国に広がります。１９９７年、静岡で開かれた第４回の交流集会は、特別な大会になりました。この大会でピープルファースト宣言が作られます。

ピープルファースト宣言
今まで私たちは自分で知り自分で決めて自分でする当たり前のことをみんなが気づかないうちに奪われました。
私たちもみんなと同じように人間らしく生きる権利があります。
私たちは、これからどんな差別に対しても声を出していけるように励ましあって闘っていきます。障害者である前に人間です(一部抜粋)

この時全国知的障害者交流集会の名前をピープルファースト大会と決めました。そして各地の代表からなる実行委員会が作られました。

初めてピープルファーストに出会って１１年。２００４年には全国組織のピープルファーストジャパンが作られました。その時に、**「入所施設をなくす」「差別・虐待をなくす」「地域生活のサービスをふやす」「仲間をふやす」**を、活動の４つの柱に決めました。

ピープルファーストの活動を始めた頃、日本では、知的障害者は「精神薄弱」「知恵遅れ」と周りの人から呼ばれ、社会の役に立たないと見られていました。およそ１３万人の知的障害者が入所施設に入れられていました。入所施設のほとんどは、地域の暮らしからは離れた山の中などに作られていました。自由に外出することも難しく、社会から切り離されていたのです。そこでは虐待も多くありました。入所施設をなくす。それは、どんなに障害が重くても「地域で自由に自分らしく暮らす」ためのピープルファーストの原点でした。

その後、ピープルファースト大会は全国で開催されました。２０１９年、第２５回ピープルファースト大会は大阪で開かれました。全国から集まったのは、およそ１０００人。テーマは、ピープルファーストの歴史を振り返り、自分たちが目指すものをもう一度確認することでした。

初期のころから活動をしてきた生田進さんは、２５回を迎えた気持ちを「長いようで短かった２５年やなあ。ピープルファーストに出会ってなかったら、何も知らなかった。」と伝えてくれました。また佐々木信行さんは「ピープルファーストは、僕の生きていることの、もう一部になっている。」と語ります。土本秋夫さんは、「ずっと気持ちをまげないでやってもらいたいな。障害者である前に一人の人間として差別されないこと。自分を信じることと、仲間を信じること、まわりの人たちも信じること」と、次の世代の人に思いを伝えます。

■パンジーメディアが伝えたいこと

「知的障害者への差別や偏見を無くすために、知的障害者のことをもっと知ってもらいたい」。そのために始めたのが映像による発信です。

パンジーメディアのインターネット放送「きぼうのつばさ」は、２０１６年９月から毎月１回の配信で、２０２１年３月で５５回になります。

「パンジーメディアの主体は知的障害者」です。「きぼうのつばさ」では、番組を進行するキャスターは当事者が務めています。プロデューサーも知的障害者です。番組が知的障害者の視点で作られているかどうかをチェックします。それ以外に、３台のカメラの映像を切り替えるなどのスイッチの担当や、音声の担当も知的障害者がしています。

番組は、企画、演出、撮影、出演、編集など多くのプロセスを経て完成します。そのため、様々な担当の人が協力し合う必要があります。一つ一つの担当者が自分の役割を持つ。そのことが一人一人のモチベーションにつながっています。

「きぼうのつばさ」は、知的障害を持つ人の視点から番組が作られ、４つのコーナーで構成しています。

「パンジーの眼」は、その時々の知的障害者に関係する社会の状況や事件を、知的障害者の立場から見つめ考え、その思いを発信します。やまゆり園事件は、５回取り上げました。本来、知的障害者に関わることについては、知的障害者の声を聞くことが必要ではないでしょうか。しかし、知的障害者は、自分たちの置かれている状況や法律について考えたり意見を求められる機会はほとんどありません。知的障害を持っている当事者が自分の考えを持ち、意見を言えるための情報提供も意図しています。

「パンジーキッチン」は、知的障害者がシェフになり、さまざまな料理に挑戦をし、仲間に食べてもらいます。知的障害者の多くは、危ないのを理由に、料理をさせてもらえなかった人が多くいます。料理だけでなく、これまで、やりたくてもやらせてもらえなかったことに、チャレンジをしてほしいとの願いを込めています。

「私の歴史」は、知的障害者が自分がたどってきた人生を語ります。つらかった事、悲しかった事、うれしかった事など、誰にも語ったことのない自分の歴史です。始めた頃は、自分の歴史を語ろうという人は、ほとんどいませんでした。これまでの人生で、差別や偏見の中で自由に自分のことを話す機会はありませんでした。また、話してはいけないと思っていたのかもしれません。しかし、語り終えた時は、表情が変わっていました。何かから解放されたような表情。時には泣き出す人もいます。心の中の重荷をおろした喜びかもしれません。映像の中に、そんな仲間の姿を見て、自分も語りたちという人が増えています。

「ドキュメント」は、どんなに障害が重くても地域でくらそうがテーマです。地域でくらす知的障害者の日常を紹介します。また、当事者が企画したドラマもあります。自分たちで番組を企画して、キャスティングや脚本のチェックをしたり、出演することもあります。

■マスコミや視聴者の反応

マスコミで最初に取り上げたのは、NHK のハートネットテレビです。「きぼうのつばさ」の準備から第一回放送まで、数カ月にわたる取材でした。また、多くの新聞や雑誌などが取り上げました。最近では、MBS の「ミント」で特集されました。そして、番組を見た人たちからも多くの感想が寄せられています。少しずつですが、知的障害者と社会の人の垣根が低くなり始めているのを感じます。そのいくつかを紹介します。

・社会の中で自分の居場所があること、自分らしく輝ける場所があることは、誰にでも平等にあるべき大切なことだと改めて思いました。

・一人一人が思って考えて苦労して喜んで・・・生きて今・・・そんな姿に涙が出そうでした。こんな風に障害を持った人のことを知ったのは初めてです。

■終わりに

ピープルファーストからパンジーメディアへ。社会に発信する方法は違っていても、その奥に流れる思いは同じです。

優生思想が生まれた１９世紀から今に続くまで、社会の中にある差別や偏見はなくなりません。しかし、その時々に、様々な方法で声を上げることで少しずつ変わってきています。その歩みはゆっくりしたものだけれど、「立ち止まることなく前に進み続ける」。そして、次の世代に引き継いでいくことが私たちの目指すことだと考えています。いつの日か、だれもが自分らしく暮らせる社会になるように。

そして、ピープルファーストやパンジーメディアのような当事者活動が、どんなに大切かに気づいてほしいと思います。

２　創 思 苑　概 要

１．理事会・評議員会

○　理事会については、以下の通り開催した。

２０２０年度第１回理事会　　2020 年５月 28 日

２０２０年度第２回理事会　　2020 年６月 24 日

２０２０年度第３回理事会　　2020 年９月９日

２０２０年度第４回理事会　　2021 年２月 10 日

○評議員会を次の通り開催した。

２０２０年度第１回評議員会　　2020 年６月 24 日

２０２０年度第２回評議員会　　2020 年９月（コロナウイルス感染予防のため書面決議）

２０２１年度第３回評議員会　　2021 年３月 25 日

３．利用者の状況

①日中活動・・・２０２０年度の開所日は、年間２５７日

○クリエイティブハウス「パンジー」　生活介護　定員 32 名

月別平均利用数　（人）

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10 月	11 月	12 月	1月	2月	3月	合計
31.6	31.4	32.1	32.0	31.2	31.5	31.9	31.1	31.6	31.1	31.6	31.8	31.6

区分別利用者延人数

区分2	区分3	区分4	区分5	区分6	平均区分	平均利用者数
0	0	457	2,516	5,142	5.46	31.6

○クリエイティブハウス「パンジーⅡ」　生活介護　定員 30 名

月別平均利用数　（人）

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10 月	11 月	12 月	1月	2月	3月	合計
28.5	28.6	30.3	28	28.8	28.8	29.7	28.7	29.2	28.4	27.9	27.7	28.8

区分別利用者延人数

区分2	区分3	区分4	区分5	区分6	平均区分	平均利用者数
0	247	1,199	1,940	3,995	5.19	28.8

○はっしんきちザ・ハート　（従たる事業所・　定員 6 名）

月別平均利用者数　（人）

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10 月	11 月	12 月	1月	2月	3月	合計
5.8	5.9	6.0	5.9	5.9	5.9	6.0	5.9	5.9	5.9	5.9	5.7	5.9

区分別利用者延人数

区分2	区分3	区分4	区分5	区分6	平均区分	平均利用者数
0			252	1,021	5.52	5.9

○クリエイティブハウス「パンジーⅢ」　生活介護　定員３０名

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10 月	11 月	12 月	1月	2月	3月	合計
30.1	29.0	30.7	29.9	28.9	28.2	29.4	28.9	29.0	28	28.4	28.1	29.1

区分別利用者延人数

区分2	区分3	区分4	区分5	区分6	平均区分	平均利用者数
0	679	2,963	2,145	1,682	4.57	29.1

○クリエイティブハウス「パンジーⅤ」生活介護　定員１０名

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10 月	11 月	12 月	1月	2月	3月	合計
9.0	9.00	9.7	10.2	10.8	10.5	10.1	10.5	11.1	11.4	11.6	11.5	10.5

区分別利用者延人数／生活介護のみ（人）

区分2	区分3	区分4	区分5	区分6	平均区分	平均利用者数
0	264	505	1,336	575	4.83	10.5

○クリエイティブハウス「パンジーⅤ」就労継続支援Ｂ型　定員１０名

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10 月	11 月	12 月	1月	2月	3月	合計
2.0	1.9	2.0	2.0	2.0	2.5	2.8	2.8	1.8	2.0	1.7	2.0	2.1

②グループホーム（共同生活介護）　　定員８１名　　２４住居

○２０２０年度利用延べ人数

区分２	区分３	区分４	区分５	区分６	合計	平均区分
1, 460	1, 825	5, 004	5, 022	11, 451	24, 762	4. 93

○年齢

	～29 歳	30 歳～	40 歳～	50 歳～	60 歳～	70 歳～	平均年齢
人数	3	13	31	16	4	4	44.3

４．職員関係

①職員の採用・退職状況（３月末の数）

	職員数	育休･休職者	入職者	退職者(年間)
2016年度	59	0	10	8
2017年度	58	2	8	7
2018年度	58	0	7	7
2019年度	62	0	9(3)	5
2020年度	58	1	5(1)	6

※入職者のうち、() は、パンジーＶ。

※嘱託職員含む

②研修について

１， 内部研修

・メディア勉強会

・新人研修

・対大阪府交渉勉強会

・事業計画・理念と運営方針

・支援についてパンジーでとりくんだこと

・私の歴史の聞き取りから学んだこと

・地域で自分らしくくらす

・「大阪府利用者支援のガイドライン」を元にした勉強会

・パンジーメディアを見て

２，外部研修

・サービス管理責任者更新研修

・強度行動障害研修基礎編・実践編

・はじめての施設長育成塾

③外部会議への参加について

以下の会議に参加し、積極的に情報交換等を行い職員の意識の向上を図った。

・ピープルファースト大阪会議

・ピープルファーストジャパン会議

・東大阪市自立支援協議会

・相談支援連絡会

・障大連東ブロック会議

・東大阪市障害児・者施設連絡会

・東大阪市事業所連絡会（幹事会・グループホーム部会・短期入所部会）

・東大阪市共同受注会幹事会

５．　年間行事・運動等について

コロナ感染予防のため、パンジーまつり、パンジー旅行は中止した。

５月‥保護者懇談会

６月…職員健康診断

７月…対府交渉・デモ行進

１０月…保護者懇談会

１１月…インフルエンザ予防接種

１２月…クリスマス会／健康診断

３　リスクマネジメント委員会報告

１，委員会の開催　　７月、９月、１１月、３月

新型コロナウィルスが蔓延し、緊急事態宣言が発出されたため、春の委員会の開催は見送ったが、夏以降は、感染対策を行った上で開催した。

委員会では、年間を通じて起きる事故や事例について丁寧に話し合いを行い、必要なときには、委員が各場の職員会議に参加するなどをして、事故の要因分析や、創思苑が大切にしてきた当事者支援について話し合った。

２．「事故」「興奮時の緊急対応」「苦情」の年間件数（2020.4～2021.3）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅴ	GH	居宅	SS	その他	合計
事故（ケガ・急病）	1	2		5	8	1			１７
（見失い）		2				1			3
（誤薬）	2	2		1	8	2	1		１６
（誤嚥誤飲）			1						1
（車両）	3	2	8	1	1			7	２２
（他傷行為）		2	3	2	1			1	9
（物損）				5	6			2	１３
タイムアウト対応									0
頓服対応	4	6		1					１１
苦情			4		7	2		１１	２４

【　概要　】

車両事故が 2019 年度の 29 件、20 年度 22 件と高止まりしている。職員だけでなく、送迎のドライバーの事故・苦情も目立つことから、委員会で対応を検討し、ドライバー会議にて周知を行った。服薬支援において、飲み忘れ・渡し間違いなどの事故が頻発した際には、各部門でミスを防ぐために実践している方法を共有し、再発防止について話し合った。見失い事故は、19 年度の 10 件から減少しているが、コロナ禍により外出を控えていることの影響が大きい。

4　パンジーメディア

① インターネット放送局「きぼうのつばさ」放送内容

放送	パンジーの眼	私の歴史	パンジーキッチン	ドキュメント
44 回 4/24	特別編成「あいむはっぴぃ！と叫びたい～前編～」			
45 回 5/22	特別編成「あいむはっぴぃ！と叫びたい～後編～」			
46 回 6/26	ぼくも、ともだちといっしょの学校に行きたい		作るのかんたん クロアチア風ソーセージ	闇の王～入所施設からのだっしゅつ～完全版
47 回 7/24	相模原事件から4年	やっと見つけた自分の居場所　四田敏男	かんたんかわいいてまりずし	健司は健司のままでいい～自立その夢に近づく～
48 回 8/28	特別企画：私たちが伝えたいこと「きぼうのつばさ」4 年をふりかえる			
49 回 9/25	特集：クリエイティブハウス「パンジーＶ」 地域でくらすためには	夢はグループホームでくらすこと　三谷浩美		すこし自信がついたかな
50 回 10/30	職員めんせつ	自立を決めた日 谷口幸子	教えてあげるよ ぼくのいももち	堀川幸子さんとつながるために
51 回 11/27	人間としての尊厳	はじめて持つことができたゆめ　坂田次美	クラムチャウダー 山田シェフのちょうせん	ぼくもわたしもみんなが主役　奈良・ちいろば園のちょうせん
52 回 12/25	人間としての尊厳2	もっと聞いてほしいわたしの思い　山下寿枝	りょうり教室～クリスマスにはチョコレートケーキ～	健司は健司のままでいい～じりつのちょうせん～
53 回 1/22	ドラマ「あのころ　ぼくたち　わたしたちは」			
54 回 2/26	人間としての尊厳3	ぼくの旅 大城二三夫	山下シェフの オリジナルレシピ	あなたは性について知っていますか? セクシャリティを学ぶ
55 回 3/26	私の歴史スペシャル4　～もっと話を聞いてほしい　いっしょに考えてほしい～			

② ホームページ・フェイスブック・パンジーだよりについて

・運営サイト

創思苑「自分で決める！」年間ユーザー 6,709 セッション 9,894 ページビュー 29,215

パンジーメディア 年間ユーザー 4,046 セッション 10,645 ページビュー 53,282

映画「あいむはっぴい！と叫びたい」

RDI コンサルテーション ――生きにくさを抱えた人たちへ

・フェイスブック

社会福祉法人創思苑 フォロワー553 人

ヒマラヤの青い空と白い雪がくれたもの／＜英語版＞Gifts from the Himaraya

みんなに伝えたいこと～ピープルファースト 25 年の歩み～／＜英語版＞In our Own Worlds

・パンジーだより

N0.84 ５月２２日発行 NO.85 １０月７日発行 NO.86 ２月１４日発行

③ DVD 制作・販売について

ドキュメンタリー映画『みんなに伝えたいこと～ピープルファースト 25 年の歩み～』

ドキュメンタリー映画『ヒマラヤの青い空と白い雪がくれたもの』

個人、障害者団体をはじめ、岐阜医療科学大学、國學院大學、ルーテル学院大学、淑徳大学、立命館大学、徳島池田高校、曽爾中学校などの学校図書館や教材としての注文があった。学生や子どもたちに広く見てもらい、知的障害者への理解が深まることを期待している。

④ 講演会活動

日程	依頼先	講演内容
７月５日	自立生活支援センター「わくわく」	ガイドヘルパー養成研修
10 月 28 日	東大阪市 人権教育研究会 障害児教育専門部	ともだちと一緒の学校に行きたい
12 月 21 日	大阪市 障がい者相談支援研修センター	強度行動障がいのある人への支援の実際 ～地域移行支援の取組～
２月２４日	マッセ市民セミナー （大阪府社会福祉協議会）	津久井やまゆり園事件で私たちが感じたこと、伝えたいこと 地域で自分らしく暮らす ～パンジーメディアの役割～

大阪市主催「施設から地域へ～強度行動障がいのある人への支援を中心に～」

入所施設から地域への移行をすすめたいという大阪市の強い思いのもと企画されたものです。新型コロナへの感染対策が取られる中、パンジーから北田と福岡の職員２人が講師として登壇し、約 80 名の参加がありました。

講師の大阪府立大学の三田優子先生は、地域移行を推進する立場から研究されています。題材の映像はパンジーが２０１０年に製作した、大規模施設砂川厚生福祉センターとの地域移行の取り組みを描い

た**「地域で暮らすために　～強度行動障がいを示す人の可能性をさぐる」**です。入所施設の職員と地域の福祉関係者は、お互いの状況を知らなさすぎる。この取り組みのように連携することが大切だと話します。

パンジーは、パンジーメディアで製作した**「ふたりの知的障害者」「健司は健司のままでいい」**を上映し、行動障害のある人の地域生活支援を伝えました。当事者の大川誠さんは三田先生が紹介した 10 年前の映像と、「ふたりの知的障害者」両作品の主人公。入所施設に入った経過、地域移行の取り組み、今のくらし。その人の障害に目を向けるのではなく、ライフヒストリーを知って、自分たちと同じ一人の人間だと感じてほしいと伝えました。

　１０年前の映像を見た方が、今回も参加されていました。その時の映像を見て「あの後はきっと入所施設に戻っているだろう。今はもう地域で過ごしていないに違いない」 と思っていたと話されました。

強度行動障害など、人が名前を決めているだけで、どんなに障害が重くても、その人を尊重して支援することができれば、大川さんのように地域で買い物をし、好きなものを食べ、そして自分で決めるといった当たり前の生活を送る事ができるということ。これを大川さんからのメッセージとして、多くの人に知って欲しいと思います。

「健司は健司のままでいい」は、入所施設からも断られた当事者、上田健司さんの自立への取り組みを追った作品です。行動障害はその人の問題ではなく、支援者の関わりを変えることで見通しがもてることを示します。「強度行動障害」とレッテルを貼られることで、多くの人が地域で暮らすことを諦めさせられてきました。この研修を通じて一人でも多くの人が地域で暮らす機会になれば幸いです。（福岡）

＜参加者の感想＞

・皆同じ人間という認識の再確認ができた。あくまでも中心は利用者さんであることの認識。

・支援においてヒントになることがあり、ホームに帰って実践していこうと思いました。

・ビデオを通じ、入所施設と地域生活（GH）の暮らしの違いや QOL について学ぶことができた。

・小学校から普通学級で過ごすなど、親の想いが感じられた。施設に急に入れられて、混乱して問題行動起こすのも理解できると思った。

・わかりやすくて良かった。職員が利用者に「指示する」でなく、「リードする」との表現に驚いた。

・支援者が一方的にスキルを伝えるだけでなく、本人に自ら考え行動できる機会をつくるという支援を行うことで、本人も少しずつ変わっていく姿が見られて勉強になりました。

・地域移行、定着についての研修は何度も受講してきましたが、手法ばかりだったと思います。今日、はじめて心から「必要な事業だ」と感じました。「この忙しい中」とブツブツ言いながら出席したことをおわびしたいぐらい心に響きました。ありがとうございました。

マッセ市民セミナー

津久井やまゆり園事件で私たちが感じたこと、伝えたいこと

地域で自分らしく暮らす～パンジーメディアの役割～

津久井やまゆり園事件テーマに

知的障害者が当事者の思いを発信

ネット放送局で番組制作

2016年7月、神奈川県相模原市の障害者支援施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が元職員に殺害された事件。今夏、発生から5年を迎えるのを前に当事者の視点で事件を振り返るセミナーが2月下旬、大阪市内で開かれ、インターネット放送局で情報発信を続ける社会福祉法人「創思苑」（東大阪市）の知的障害者がパネリストとして参加。自ら制作した番組を会場で放映し、「地域で自分らしく生きたい」と思いを語った。（文／写真　今西富幸）

「どうか私たち当事者の話を聞いてください」

司会を務める中山千秋さん（53）がマイクを握り、会場に呼びかけた。知的障害を理由に中高時代は養護学級に通い、卒業後は入所施設に入ったことも。30歳から創思苑の作業所に通い始め、現在は法人が運営するインターネット放送局「パンジーメディア」で番組制作に携わっている。

セミナーの司会を務める中山千秋さん

セミナーには中山さんをはじめ、創思苑の知的障害者4人がパネリストとして参加し、約50人が聞き入った。会場では中山さんが原案を担当し、主役も務めたドラマ「あのころ　ぼくたちわたしたち」のダイジェスト版を放映。知的障害者が高校時代に戻り、自分のやりたかった恋愛や野球を体験する物語で若いころ恋に憧れた自身の思いを脚本化したものだ。

中山さんは昨年まで知的障害者の当事者団体「ピープルファーストジャパン」の会長も兼務。昨年2月には「津久井やまゆり園」を管轄する神奈川県を訪れ、黒岩祐治知事に「障害者が安心して暮らせる地域社会の実現」を求める要望書を手渡している。

セミナーで中山さんは「津久井やまゆり園で暮らしていた仲間が事件をどう思っているのか。当事者の思いを知ってほしい。私は入所施設に入るのは嫌だったけど、親や家族の思いだけで入れられました」と語り、「いまは施設を出て地域で暮らすことができています。全国の入所施設の仲間も地域で暮らせるようになってほしい。こんな事件が二度と起きないよう、一人一人が光輝ける社会をつくっていきたい」と力強く訴えた。

番組では知的障害者自身がキャスターも務める

創思苑はパンづくりなどの作業所を運営。約120人の知的障害者が通い、うち約80人が法人運営のグループホームで暮らす。「パンジーメディア」を始めたのは2016年9月。専用スタジオも完備し、原案・脚本から出演、撮影、音声機材の操作まで全業務を知的障害のある利用者が担当。ドラマのほか、自分史を振り返ったり、社会の動きを知的障害者の視点で考える約50分の番組「きぼうのつばさ」を毎月1回制作し、ホームページで配信する。津久井やまゆり園の事件についても番組で取り上げてきた。

法人理事長の林淑美さんは「知的障害者の思いを伝えるには当事者の発信が必要。地域で自分らしく暮らしていける社会の実現に向けて情報発信を続けたい」と話している。

今回のセミナー「『自分らしく生きる』とは～津久井やまゆり園事件が問いかけたもの～」は大阪府社会福祉協議会などが主催。番組はパンジーメディアのホームページ（https://pansymedia.com/）で視聴できる。

「檸檬新報」（2017 年 7 月 14 日に創刊された福祉と教育の季刊紙）で、紹介されました。

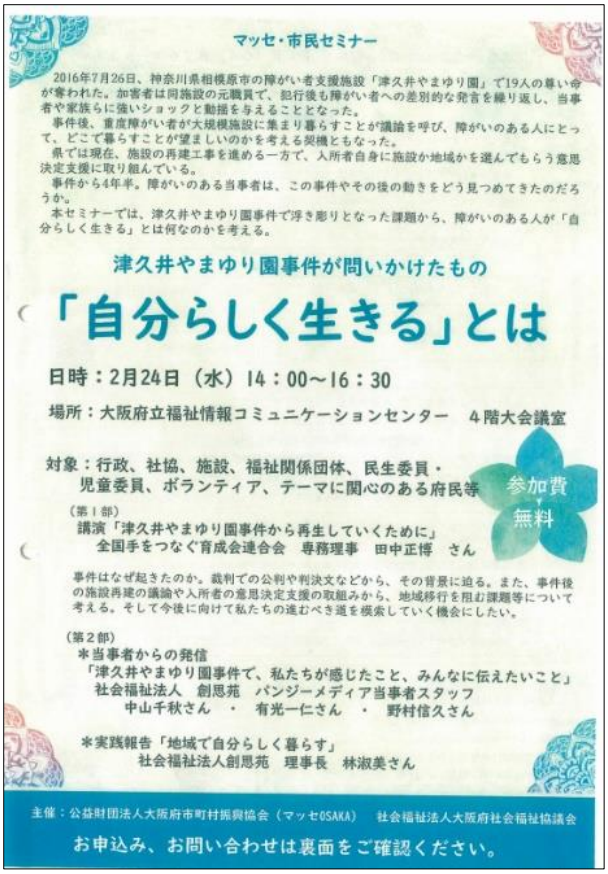
＜参加者の感想＞

・一人一人が思って考えて苦労して喜んで・・・生きて今・・・そんな姿に涙が出そうでした。こんな風に障害を持った人のことを知ったのは初めてです。

・驚いたのは、目の見えない田辺さんの撮影です。当事者が自分で撮りたいという気持ちになれる、それを身近な人に伝えられる環境は、本当に素晴らしいですね。そんななかでのコメント「風の風景を撮ります」は、田辺さんの内面からしか出てこない創作行為であり名言です。

・保護者へのインタビューで「自己表現をするようになった」と聞いた時は、思わず涙がこぼれました。

・地域でくらすあたり前の事。自分の息子はどうだろうかと自問自答の毎日です。親亡き後のことを仲間と考えている最中ですが、まだ一歩が進めていません。背中を押してくれました。
・福祉の道を歩む身としても、日々心を洗われることもあるメッセージに感無量です。
・まず、知的障害者に関する意識が変わりました。健常者の個性の幅に比べて、なんて幅の大きな個性なのだろうかと気づかされました。「障害者」としてひとくくりにすることの理不尽さに無意識だったことを反省する気持ちに自然になっています。
・やまゆり園の事、障害を持ちながら伝えてくださった優生保護法について、監禁されていた人々、そして、話してくださったインクルーシブな社会を、学生たちに伝えてゆきたいと思います。


マッセ・市民セミナー

2016年7月26日、神奈川県相模原市の障がい者支援施設「津久井やまゆり園」で19人の尊い命が奪われた。加害者は同施設の元職員で、犯行後も障がい者への差別的な発言を繰り返し、当事者や家族らに強いショックと動揺を与えることとなった。
事件後、重度障がい者が大規模施設に集まり暮らすことが議論を呼び、障がいのある人にとって、どこで暮らすことが望ましいのかを考える契機ともなった。
県では現在、施設の再建工事を進める一方で、入所者自身に施設か地域かを選んでもらう意思決定支援に取り組んでいる。
事件から4年半。障がいのある当事者は、この事件やその後の動きをどう見つめてきたのだろうか。
本セミナーでは、津久井やまゆり園事件で浮き彫りとなった課題から、障がいのある人が「自分らしく生きる」とは何なのかを考える。

津久井やまゆり園事件が問いかけたもの

「自分らしく生きる」とは

日時：2月24日（水）14：00～16：30

場所：大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター　4階大会議室

対象：行政、社協、施設、福祉関係団体、民生委員・児童委員、ボランティア、テーマに関心のある府民等

参加費無料

（第1部）
講演「津久井やまゆり園事件から再生していくために」
全国手をつなぐ育成会連合会　専務理事　田中正博　さん

事件はなぜ起きたのか。裁判での公判や判決文などから、その背景に迫る。また、事件後の施設再建の議論や入所者の意思決定支援の取組みから、地域移行を阻む課題等について考える。そして今後に向けて私たちの進むべき道を模索していく機会にしたい。

（第2部）
＊当事者からの発信
「津久井やまゆり園事件で、私たちが感じたこと、みんなに伝えたいこと」
社会福祉法人　創思苑　パンジーメディア当事者スタッフ
中山千秋さん　・　有光一仁さん　・　野村信久さん

＊実践報告「地域で自分らしく暮らす」
社会福祉法人創思苑　理事長　林淑美さん

主催：公益財団法人大阪府市町村振興協会（マッセOSAKA）　社会福祉法人大阪府社会福祉協議会
お申込み、お問い合わせは裏面をご確認ください。

5　当事者活動支援

かえる会

コロナ感染拡大防止の観点から、かえる会を開催できたのは7月からだった。各部門の当事者の代表が集まり会議をするので、開催時は感染防止の対策を行い開催した。
今年度から、新しく3名の参加者が増え、少しずつメンバーにも活気が出てきた。以前から興味があり出てみたいと思っていた人、参加してみてはどうかと進められた人様々だったが、新しくメンバーに加わる事に緊張感とやる気で溢れていた。かえる会のメンバーとしては、仲間の気持ちを考えられる人が条件となります。ベテランのメンバーは、そんなに難しく思わず、まず参加して一緒に学び、経験していけばいいと意見があり、人数が増え、活気あるかえる会になることを望んでいる。
今年は、職員面接、理事会の提言について話し合った。新しい職員がどう感じているのかを知りたいという意見が多く、今年も新人職員の面接をおこなった。質問内容や、質問の仕方については何度も練習し実践していたが、返答に対しての返しが課題となった。メンバーからは「つっこみをもっと頑張らないといけない」と意見があがっていた。
職員からの感想は、「するどい質問に答えるのに時間がかかってしまった。ちゃんと当事者に寄り添い、悩みを聞くことができているのかと振り返る機会になった」「いつもと違う緊張感があり、これからまた自分の気持ちを引き締めて頑張ろうと思えた」という意見があった。

理事会への提言

●しっかりとした　しょくいんになって　いつまでも　ながくはたらいてほしい。

そのためには、パンジーのことを知る必要があります。

たとえば・・・

今までの　パンジーの歴史を　しってほしい。

仕事の中身を　おぼえてほしい。

そして、まかせられる　しょくいんに　育ってほしい。

何でも　たいおうできる人に　なってほしい。

●わからないことがあったら、ゆっくりわかるまで　おしえてほしい。

たとえば・・・

仕事のやりかたを　ていねいに　おしえてほしい。

●自分の思いを言えない人のために、その人のことを　りかいして　しえんしてほしい。

そのためには、もっと　当事者のことを　考える　ひつようが　あります。

たとえば・・・

なぜ、つかみかかるのだろう。

なぜ、きゅうに　大きな声を　だすのだろう。

なぜ、あばれるのだろう。

なぜ、しごとを　しないのだろう。

なぜ、ほかの　とうじしゃの　わるぐちを　言うのだろう。

なぜ、仕事中に　ねるのだろう。

どんなことでも　りゆうが　あります。

とうじしゃを　わるものにせず、なぜだろうと　考えてください。

●人の気持ちがわかる　しょくいんになってほしい

たとえば・・・

もっと声をかけてほしい。

やさしく　気持ちをきいてほしい。

なんでも　話ができるしょくいんになってほしい。

おもしろい　しょくいんに　なってほしい。

●とうじしゃの　仕事をふやしてほしい。そして、いっしょに　仕事をしてほしい。

●こどもあつかいされずに、一人の大人としてみてほしい。

大人になっても　ちゃんづけで呼ばれると、　はずかしくなります。

グループホーム当事者会議

グループホーム当事者会議が開かれるようになって２年目を迎えた。毎回２０名ほどの当事者が参加し、それぞれのグループホームの報告を行っている。１人ひとりの意見を聞くこと、会議に慣れていない当事者にも、自分のくらしについて発言する機会を大切にして会議を行ってきた。

今年は特に大きな議題となるできごとはなかったが、自分たちの生活について話し合う機会を継続するため、２カ月に１度のペースで会議を行った。回を重ねることで、自分がグループホームで感じていることは、人はどう感じるのだろうか。他のグループホームはどうしているのかなど当事者同士が意見を言い合い話しあう事ができた。介護者や職員に対して伝えにくいことも、仲間の力を借りて発言をする姿があった。自分の事だけでなく、グループホームのメンバーの事を心配して報告する場面も増えた。

会議での事は、職員間、介護者間でも共有して改善を行っている。

特に、コロナ禍でグループホームの生活が制限され、外食やホームパーティーを定期的に開いていたグループホームも今までのようにはできなくなった。コロナの感染が心配される状態では「外食はあかんと思う。」という意見があり、「もう少し我慢して、いけるようになったら行く。」外食に行けない代わりに、グループホームでホームパーティーをしようということになった。

しかし、感染者の増加とともに、感染リスクを避けることから当事者と職員は、時間を分けて食べることになった。みんなと食事を楽しみたいが、この状況を考えて、納得したメンバーだった。

さらに話しを聞くと、介護者の人が座らずにいると、急かされているように感じる。ゆっくり食べられないという意見があがった。介護者は急かしているつもりはなかったが、当事者の食事の時に業務や片付けを優先してしまっていたことに気づかされた。

食事は落ち着いて食べたいという当事者の気持ちがわかり、職員は共有することができた。

ピープルファースト活動

これまでピープルファーストは、大阪や全国各地の当事者が集まり、顔を合わせて話し合い、行動するなかで、同じ思いを持つ人たちが仲間となり、大きな力を得てきた。

新型コロナウィルスの感染拡大により、各地から集まることが難しくなった 2020 年度は、活動的にも、停滞せざるを得なかった。

それでも、2019 年の第 25 回大阪大会に続く 2021 年、第 26 回兵庫大会に向けて、2020 年 12 月より全国実行委員会が開催されている。全国の当事者の人たちは、慣れないオンライン会議においても、今置かれている状況や思いを語り、開催に向けて、取り組みが進められている。

また大阪の活動においても、従来の集まっての会議は中止されたが、試行的にオンライン会議が開催され、それぞれの近況を確認しあった。

6　部門別事業報告

クリエイティブハウス「パンジー」

クリエイティブハウス「パンジーⅡ」

クリエイティブハウス「パンジーⅢ」

クリエイティブハウス「パンジーⅤ」

自立生活支援センター「わくわく」/相談支援センター「わくわく」

パンジーメディア

自立ホーム「つばさ」

部門	クリエイティブハウス「パンジー」 ＧＨ：さくら・はやぶさ・てくてく・花吉
各部門の目指す事	・一人ひとりが自分の役割に自信を持っている。 ・経験共有の中で、仲間意識を育んでいる。 ・心身ともに良好で、はつらつと暮らしている。
自分で決める役割を持つ	２０２０年の姿・目標
	・経験やスキルを活かし、他の人へ伝える・教える存在になっている。 ・自分の気持ちが言える、仲間の気持ちを聞く支え合いがある。 ・誰もが役割を持ち、いきいきと活動している。
	達成度
	・実習生や経験の浅い人にパン作りの技術を伝え、当事者間で相互支援ができる環境を作ることができた。 ・かえる会で出た当事者の意見を、月に１度の当事者会議で報告し、自分たちはどう感じたかなど気持ちを伝えられる場を作ることができた。 ・農作業やクッキングなどの日中活動を充実させ、それぞれが自分の役割をしっかりと持ち意欲的に取り組みに参加できるよう支援した。
地域でふつうにくらす	２０２０年の姿・目標
	・誰もが健康的に、充実した生活を送っている。 ・医療的なケアが行き届き、安心した生活を送っている。 ・誰もがその人らしい生活を送っている。
	達成度
	・日々の運動を習慣にすることで、健康的に減量できた当事者が数名いた。 ・ 喀痰吸引が必要な当事者が、1 日を通してパンジーへ通所する事が可能になった。 ・当事者全員がそれぞれに合った役割を持って活動できるよう、リーダーと職員が相談し合い取り組むことができた。
職員を育てる	２０２０年の姿・目標
	・当事者、家族、職員が支え合い、支援について一緒に考える事ができている。 ・積極性と責任を持ち、諦めない心を育てる。 ・当事者支援について、職員全体で考えることができている。
	達成度
	・本人と家族が職員と一緒に考え、よりよい支援が行えるように密に連絡をとった。 ・職員全員が責任を持って業務にあたり、一緒に考えていける体制を作った。 ・毎週月曜日の授産会議では、当事者の状況をフィードバックして、チームで共有していく事ができた。

一年を振り返って（エピソード・そこから学んだこと）

日中：
前年度の事業計画のひとつに、職員それぞれが自発的に考え、仕事に責任を持って取り組んで行くことを挙げていました。しかし、各業務の担当者が現状を把握できていない事や、目的を達成する為には何をしていく必要があるのかといった具体的な案を考えるまで責任を持つことができていませんでした。それは大きな課題でした。そこで職員ひとりひとりの役割と責任意識を見直し、いつまでに何をすべきかの目標を立て、チームで意識づけを行いながら業務の進捗を共有して振り返るシステムを作りました。それによって、2020 年度の授産会計が赤字だった状況がありながら、年度の途中から黒字の状態に持っていけるまでになりました。この改善を 1 つの成功事例として、新年度の当事者支援と、すべての業務に繋げていきたいと考えています。

２０２０年度も日々の活動に体を動かす生活習慣を取り入れ、すべての人が健康的な体づくりを進めていけるよう継続して取り組みました。
パンジーの昼食でも玄米ご飯や食材の改善が行われ、グループホーム、ショートステイでも食事メニューについて見直しを行いました。内側からも外側からも同時に健康を目指して取り組むことを目標としました。その結果、当事者の中では 1 年間に 15 キロもの減量に成功する人もおり、取り組みの成果が目に見えて実感できる嬉しい報告もありました。

また、昨年度は畑での農作業に力を入れた一年でもありました。当事者それぞれの役割はもちろん、土を触り自然に触れることで、心の健康にも繋がる取り組みを進めることができたと感じています。作付けから栽培、収穫までの一連のプロセスを当事者の手で行い、実際に自分達が育てた野菜が昼食のメニューとして出てくるまでを体験する事ができました。それは、そこに携わった当事者が、無農薬で野菜を育てるという事にはどんなプラスの事があるのかを、達成感とともに感じることができる取り組みになったのではないかと思っています。

グループホーム：
グループホームでは、２０２０年１０月より、自立ホームさくら 101 へ、新たに１名が入居しました。強度行動障害を持つ当事者の受け入れにおいて、支援の方法を改めて見つめ直す機会となりました。日中の受け入れから関係性を構築し、そして同年にグループホームへ移行、安定した生活を作ることができました。この取り組みは、パンジー職員の強みになったと感じています。
今後も、これまで職員が培ってきたスキルを存分に発揮しながら、当事者・家族と共に考え、よりよい支援を見出していく基本姿勢を大切にしていきたいと考えています。

部門	クリエイティブハウス「パンジーⅡ」／はっしんきちザ・ハート ＧＨ：春宮・はなぞの・あじさい・コスモス・あかだ・たんぽぽ・つばさ
部門の目指す事	・一人ひとりが自分の存在・役割に自信を持っている。 ・一人ひとりの人生に寄り添いながら支援ができている。
自分で決める役割を持つ	２０２０年の姿・目標
	・外出活動を充実させて地域とつながりを持つ機会を増やす。活動の中で当事者同士が助け合える関係をつくる。 ・当事者の活動の幅が広がり、充実した生活を送っている。 ・自分の気持ちが言える安心感と、人の気持ちを理解する支え合いがある。
	達成度
	・清掃に参加できるメンバーを、２名増やすことができた。 ・コロナ禍ではあったが、年間を通して販売活動を行い地域とのつながりを持てた。車検証を折る作業など新しい仕事に取り組むことができ、活動の選択肢を広げられた。 ・月に１回わくわく会を開催し、当事者同士の意見交換をすることができた。
地域でふつうにくらす	２０２０年の姿・目標
	・健康的に充実した生活を送っている。 ・多方面に渡る社会資源を活用し、安心した生活を送っている。 ・医療が必要な人も、安心して地域生活を送り続けている。
	達成度
	・訪問看護等の地域医療と連携して医療的な支援が必要な人の支援を行うことができた。 ・３名の当事者が入院した。コロナ禍の中で、入院時に面会できないという課題があり、直接看護してくれる看護師とのコミュニケーションが非常に重要だった。
職員を育てる	２０２０年の姿・目標
	・当事者の心の内に寄り添った支援をしている。 ・諦めない、めげない、くじけない心を持った職員を育てる。 ・当事者の可能性を信じて行動できる職員を育てる。 ・当事者同士が助け合える関係作りを支援できる職員を育てる。
	達成度
	・アセスメント表の見直しを行ったが、成育歴に関してはできていない。 ・金曜日のハイキング、クッキングやリラックスの活動は定着することができた。今後は、活動が充実するための取り組みを行っていく必要性がある。 ・職員がまだまだ、当事者の可能性を信じて任せられていない場面があるので、役割や関係性を作れるような支援を大切にしていく。

一年を振り返って（エピソード・そこから学んだこと）

日中

２０２０年度は、新型コロナウィルスの感染拡大に伴い、私たちの日常が大きく変わってしまった。目には見えない未知のウィルスにどう対処していいのか、職員にとっても初めての経験だった。

そんな中で印象的だったエピソードがある。パンジーⅡに通う河野明裕さんは、不安なことや心配事があると、声を荒げ、時に暴力的な行動をすることで自分の気持ちを表現する。
普段電車に乗ったり、旅行をすることで気持ちを発散していた。しかし、このコロナウィルスの流行で、大切な時間が奪われた。職員も初めてのことで曖昧なことしか答えられなかった。しかし、河野さんは YES か NO か明確な答えを求める。わかりにくい表現や曖昧な表現では、河野さんには伝わらずに、どんどん不安が募っていき、時には２時間以上話し込まないと納得できないこともあった。コロナの情報も日々変わる中で、Goto トラベルが始まったり、緊急事態宣言が出されたりと、社会状況もその時々で大きく変わった１年だった。職員は、河野さんの不安な気持ちに寄り添うために１時間でも２時間でも話を聞いていた。しかし、それを見ていた臨床心理士の池下さんから、職員が巻き込まれているのではと指摘を受けた。職員間で河野さんの関わりについて、振り返りをした。そうすると、はじめは河野さんの不安を解消することを目指していたが、いつのまにか、河野さんが怒らないようにすることが目的になっていることがわかった。本来目指していたことから、いつの間にか対処的な支援になっていることに気づかされた。その後、話し合いを重ね河野さんの支援に関して、個々で対応するのではなく、チームで役割分担をして取り組むこと。定期的に振り返りをすることを決め実施している。そうすると、これまで長い時で２時間以上イライラした様子で話していた河野さんが、１０分程度で気持ちを切り替えられ作業に取り組むことができるようになってきている。

本来目指すことが何なのかしっかりと確認しながら支援をすることの大切さを学んだ。

グループホーム

石川健志さん、平成２０年に入所施設からパンジーへ地域移行されてきた。グループホームでの石川さんは、「仲間がおるから」と仲間と過ごす時間を大切にされていた。また、お父さんとも毎週日曜日に一緒に過ごし、イオンやドライブに出かけられ、家族との関係も深めることが出来た１２年間だった。　昨年３月に内臓の癌の手術をしたが、多臓器にも転移がみつかった。闘病生活を続けていたが、年が明けて急激に食事が食べられなくなり、体の衰えが目立つようになった。１月１９日嘔吐が続き、救急搬送されそのまま入院になった。コロナ禍の中見舞いもおぼつかなかったが、２月１日に退院する事ができた。その後はグループホームで仲間に囲まれながら過ごすことができた。２月４日、春宮のメンバーが帰宅する寸前に、息を引き取られた。

石川さんの看取りを通して、地域での医療連携の大切さや、パンジーだけでなく様々な人から協力を得ることで充実した生活を送れることを強く実感した。今後も多方面の連携をしっかりと図りながら、生活を支援していきます。

部門	クリエイティブハウス「パンジーⅢ」 ＧＨ：青空・よしだ８０９・もくもく２０８・こうのいけ
部門の 目指す事	・日中活動を楽しんで、輝いている。 ・自分の生活を楽しみ、健康的に過ごせている。 ・仲間のことを大切に考え、助け合える関係をつくる。
自分で 決める、 役割を 持つ	２０２０年の姿・目標
	・当事者それぞれの役割があり自信をもって主体的に動いている。 ・ネイチャークラブやメディア・当事者活動が日中活動に定着している。 ・料理や、自分のしたいことを楽しんでいる。 ・食材や調理方法を検討し、健康的で安全な食事を提供できている。
	達成度
	・一部の当事者は厨房や、メディアで役割をもつことができた。 ・メディアと当事者活動は定着している。コロナの影響で冬からネイチャークラブは活動できていない。 ・クッキングをしたい人は、毎週金曜日のクッキングに参加することができた。 ・２０２０年度の食費を見直しより安全な食材に切り替えた。２０２１年に引き継ぐ。
地域で ふつうに くらす	２０２０年の姿・目標
	・グループホームの生活が自分らしいものになって楽しめている。 ・余暇活動が、趣味や外出先が広がり充実している。 ・医療が必要な人も安心して生活できている。
	達成度
	・グループホーム当事者会議で、思っていることを伝え、改善が必要なことを取り組んできた。自分らしい生活のために、次の課題が見えてきた。 ・コロナのため積極的に外部に行くことができていない。 ・必要に応じてグループホームに訪問してもらい、医療を受けることができた。
職員を 育てる	２０２０年の姿・目標
	・当事者を尊敬できる職員を育てる。 ・当事者の可能性を信じて関われる職員を育てる。 ・かかわりの基本を大切にし、チームとして支援を継続して行えている。
	達成度
	・当事者を尊敬する努力をしているが、より理解を深める努力する。 ・当事者の可能性を信じ、まずは話をしつかりと聞くことを大切にした。その内容を共有したときに新たな気づきがあった。しかし、まだまだ深くかかわることができていないので今後も継続する。 ・かかわりの基本を改めて考えた。連携が十分ではないこともあったので、しっかりと準備して支援にのぞむことを確認した。

一年を振り返って（エピソード・そこから学んだこと）

日中

コロナにより、三密を避ける、手洗いをする、予防する意識がしっかりと定着しました。そのような中で、自分たちができる活動を見なおしてきました。

まず、「１日１回はしっかり体を動かそう」ということを合言葉に、毎日、ラジオ体操をしました。また、掃除する担当を決めて、毎日１０分間掃除をしています。掃き掃除、ぞうきんがけ、ゴミ集めなど、一人ひとりが分担した場所を責任をもって掃除してきました。

コロナの状況で、外部への弁当販売の縮小を考えました。しかし、販売先の人たちから「パンジーのごはんがおいしいから、やめないでほしい」とうれしい要望がありました。そのため、配達をし、弁当箱を回収していましたが、使い捨ての容器に変えて配達を続けてきました。注文数が増えているので、盛付けをする人たちも気合が入りました。

食材費について全面的に見直しました。お米は無農薬の玄米を使っていましたが、調味料や野菜は、冷凍の物を使っていました。安心、安全の食材を使えるように、全面的に食費を見直しました。

コロナとは当面つきあっていかないといけません。できないと悲観的になるのではなく、健康に気をつけ、衛生面にも気をつけながらできることを続けていきます。

グループホーム

コロナ禍のため、外出活動をひかえた一年でした。

ホームで楽しめることは何だろう？　と当事者に相談したときに、料理がしたいという意見がありました。そこでお好み焼きを作ったり、クッキーの粉を買って、料理やお菓子作りにチャレンジしました。それでも、たくさん時間があったため、男性グループホームでは、大掃除と断捨離をしました。「これか必要になる」「予備に置いておきたい」などの意見がありましたが、一つひとつ話しあって整理整頓をし、部屋がきれいになりました。

また、５人の当事者がスマートフォンを購入しました。Wi-Fi がつながるように設定をし、ラインとフェイスブックをはじめました。ラインのスタンプを交換したり、フェイスブックの友達が１００人を超したりと、思い思いに楽しんでいます。その中でも、ＹｏｕＴｕｂｅが人気でした。

表さんは海援隊のファンだったのですが、「手軽に音楽が聴くことができる」と、話をしてくれました。辰己さんはカラオケでアニメの曲をたくさん唄えるのですが、「レパートリーが増えた、すごいよ！　ユーチューブはなんでもあるよ」と嬉しそうに見せてくれました。

コロナ禍で外出する機会が減りましたが、また違う面白いことを発見できた一年でした。

部門	クリエイティブハウス「パンジーＶ」 生活介護　就労支援Ｂ型　ショートステイ
部門の目指す事	・自分に自信をもって、安心して通えている。 ・食事や運動を楽しんで、健康的に過ごせている。 ・カフェやホールを地域の人がパンジーＶを利用している。
自分で決める、役割を持つ	２０２０年の姿・目標
	・自信を持っていきいきと作業などにとりくんでいる。 ・地域の人がパンジーのイベントに参加している。 ・ピープルファースト運動に当事者が積極的にかかわっている。
	達成度
	・農作業、軽作業に加えて、清掃業も始まり、それぞれに合った仕事を、それぞれのペースで取り組むことができた。 ・イベントはコロナの影響で開催できなかった。 ・ピープルファースト大会も開催されなかったため、参加できなかった。ピープルファースト運動の映像を法人で作成し、みんなで鑑賞した。
地域でふつうにくらす	２０２０年の姿・目標
	・グループホームが開設されている。 ・ショートステイが、自立に向けたステップになっている。 ・日中活動で運動や創作活動を行っている。
	達成度
	・グループホーム開設に向けて、消防や行政とやり取りをしてきたが、２０２１年４月の開設には至らなかった。 ・ショートステイは慣れるにつれて、自立につながる利用に近づいている。 ・日中では近隣のウォーキングや山のハイキングで運動し、おやつのクッキングやアートリンク活動を通じて創作活動を行った。
職員を育てる	２０２０年の姿・目標
	・当事者を尊敬して関われている。 ・当事者の可能性を信じて支援している。 ・当事者や保護者との信頼関係が築けている。
	達成度
	・当事者に敬意を持って関わっている。 ・当事者の可能性を信じて、RDI なども取り入れながら支援した。 ・２年目の人達とは関係性が築けてきた。新しい当事者もどんどん増えているため、少しずつ関係性を築いている。

一年を振り返って（エピソード・そこから学んだこと）

日中

パンジーＶが高松市にオープンし２年目になりました。２０２０年度は１年間で７人の当事者が加わり、契約者は生活介護１６人、就労継続支援Ｂ型３人となりました。パンジーＶに来て間もない頃は緊張する人、落ち着かない人、それゆえに物を投げたりする人もいました。その都度、話をしたり、支援を見直しました。しばらくするとみんなそれぞれの形で馴染んで、一緒に仕事や活動をし、それぞれのペースで楽しく過ごしています。順応性の高さにこちらが驚かされるぐらいです。パンジーＶはまだ定員に余裕があるので、これからも多くの人に入ってきてもらいたいと思います。

２年目となる野菜作りは少しずつノウハウを学び、なんとか形になってきました。年度初めは外部の野菜の販売先が２カ所しかなく、コロナ禍でカフェを閉店しているため、作付けを少なめに設定していました。そのため、収穫量が少なく、売れ残って困ることはなかったのですが、当事者の給料を稼ぐためにどうしようかと話し合いました。最初はどうやって既存の路線でやっていくかという意見が多かった中、理事長の「もっと積極的に」というアドバイスもあり、みんなで販売先を開拓することにしました。その結果、産直市場や飲食店、保育園など販売先が８カ所に増えました。それと並行して作付け計画を２倍、４倍と増やしていきました。２０２１年の５月には大量のタマネギ、ジャガイモ、ソラマメが収穫できる予定です。また、新たに清掃業も始めました。農作業で培ったノウハウをもとに草抜きの仕事がメインです。

パンジーＶは外に出る活動が多くあります。畑が３カ所あり、毎日、水やりと収穫をし、出荷もします。清掃も外での仕事です。仕事の合間に行く近隣のウォーキング、毎週水曜日に車で出かけるハイキングもすっかり定着しました。ハイキングの行き先は当事者会で話し合って決めます。「ハイキングどこ行く？」と楽しみにしています。当事者たちは毎朝、ホワイトボードで自分のスケジュールを確認しています。「畑かな」「清掃かな」「軽作業かな」と毎日、楽しそうです。毎日、午前か午後の１回は外出するため、「行ってきます」と「ただいま」の声が玄関に響いています。

２０２０年から始めたアートリンクは高松市の事業で芸術家を招いて、みんなで創作活動をします。パンジーＶに来てくれる芸術家の山端さんはその都度、プランを考えてくれます。絵を描いたり、貼り絵をしたり、粘土をこねたりと色々チャレンジしました。３月には瓦町フラッグで展覧会も開催され、みんなの作品が展示されました。コロナに気をつけながら見に行くこともできました。次年度も続けていく予定です。

また、年度末に、当事者の一人が自宅で転倒した際、骨折し、入院しての手術となりました。治りが遅く、予想以上に長い入院となりました。続けてもう一人、病気で入院して手術となりました。こちらは比較的早く退院予定ですが、コロナ禍で見舞いも自由に行くことができず、二人とも入院生活で体が鈍らないか心配です。香川県は全国的に見てもコロナ感染者が少ないですが、それでも感染予防の徹底、カフェの閉鎖、見舞いに行けないなど、コロナに悩まされた１年でした。２０２１年には収束することを切に願うばかりです。

部門	自立生活支援センターわくわく / 相談支援センターわくわく ＧＨ：もくもく３０８
部門の目指す事	・自信を取り戻し、自分らしく、生きている。 ・支援者がチャレンジ精神を持ち、当事者とともに、成長する。
自分で決める、役割を持つ	２０２０年の姿・目標
	・同年代と同じ楽しみや生き方を選ぶことができている。
	達成度
	・居宅ではコロナの影響もあり、行き先や行動の制限はあったが、その分、ウォーキングを行ったり、居宅内での過ごし方を工夫できている。
地域でふつうにくらす	２０２０年の姿・目標
	・様々な環境にあっても、自分の暮らしに誇りを持てている。 ・支援者と信頼関係を築いて、自分の思いを伝えることが出来ている。
	達成度
	・行政、CSW、訪問看護、民生委員など、多様な関係機関と連携したチーム支援で、困難ケースとも呼ばれる多問題を抱える相談者を地域で支えることが継続できている。 ・ガイドヘルパーとは、コロナの影響により居宅で一緒に過ごし、会話をすることで、利用者のことを知る機会となっている。そのため不十分ではあるが、信頼関係は少しづつできていきている。
職員を育てる	２０２０年の姿・目標
	・支援者が当事者を尊敬した配慮、言葉遣いができるようになっている ・事業運営が安定し、課題に適切に取り組める環境になっている
	達成度
	・相談支援の初任者研修、現任研修をそれぞれの相談員が受講して、相談員としてのスキルアップに励むことができた。 ・今年度はガイドヘルパー現任研修ができなかったこともあり、ヘルパーとは活動報告を通じ、相談に応じたり、支援のアドバイスは意識して行った。

一年を振り返って（エピソード・そこから学んだこと）

（相談部門）

委託相談支援として 2020 年度は、計 188 人からの相談を受け、計 3522 件の対応を行いました。年度当初は新型コロナの影響で、訪問を控えたり相談件数も少なかったですが、6 月頃より相談件数は例年並みに戻り、毎月 5～10 人程度の新規相談にも対応してきました。初期対応以降も継続

して関わることが多いので、限られた相談員ですべて対応するのが困難な状況にあまり変化はありません。

相談者の内訳としては、精神、知的、身体とそれぞれほぼ同数ですが、最近は難病や高次脳機能障害に起因する身体障害の方、発達障害がベースにある精神障害の方の相談など重複、複合的な課題に対応することが多くなっています。生活上の様々な課題を抱えているため、訪問看護などの多機関と連携してチーム支援をする形が定着してきました。また、年度途中には新規の計画相談事業所が複数開設されたこともあり、継続ケースを計画相談事業所と共に関わることも増えています。複数の相談員（事業所）で対応することで、支援者も効率的に動くことができ、委託相談としての本来の役割も取りやすくなってきています。

東大阪市の自立支援協議会でも、委託相談支援センターが中核的役割を担いつつあります。相談事例の中には、これまで福祉サービスを一切利用してこなかった障害当事者が、親が入院するなどしていきなり困窮状態に陥る 8050 問題や、親の精神疾患等が理由で、学校に行けなかったり、兄弟の世話を強いられたりするヤングケアラーの問題など、相談支援の現場では様々な地域課題に日々向き合ってきました。協議会の場でそれらの課題を十分議論できたわけではないが、それぞれの課題については、関係機関同士で共有しつつ、課題解決にむけて話し合うことはできました。

その他、社会資源としては、株式会社等によるグループホーム事業への新規参入が年々増してきています。利用できる福祉サービスが増えることは、選択肢の幅も広がりありがたいのですが、行動障害のある（区分も高い）当事者を受け入れてもらえるグループホームや日中活動の場はまだまだ少ないのが実情です。

（居宅部門）

昨年度から引き続き、新型コロナの影響を受けた 1 年だった。わくわくのガイドヘルパーの特徴としてグループホームへの派遣が多く、そのため 1 年を通じてコンスタントに派遣は行われたが、大阪府の新型コロナの警戒信号の色により、わくわく独自に行き先や行動の制限を行ったことで、特に在宅の人がガイドヘルパーの利用を控えることも多かった。また、ガイドヘルプを利用した人でも、自分の好きな行程を組めず、ストレスを感じる人も多数いた。

しかし、長く続くこの新型コロナの影響の中で、居宅での支援、散歩などで、利用者やガイドヘルパー双方が、会話や顔を見合わせる機会が増えたことにより、お互いがお互いのことを知るよい機会になっていると感じている。

また、新型コロナの警戒信号が青・黄色の時期には、利用者の希望に応じ、ガイドヘルパーの派遣を行い、それぞれが外出し趣味や、観光など楽しむことができた。ただ、マスク着用に関しては世間の目が厳しくなっており、どうしてもマスクが出来ない人への支援方針が立てきれておらず、これは今後の課題である。

部門	パンジーメディア
部門の目指す事	・当事者が役割を持ち、メディアの活動に自信を持って取り組めている。 ・『きぼうのつばさ』の英語版放送を始めている。 ・上映会、本の出版、講演会など積極的に活動をしている。 ・障害者の権利条約の審議について、自分たちのことばで発信している。 ・『青い空と白い雪がくれたもの』の映画を広める。
自分で決める、役割を持つ	２０２０年の姿・目標
	・「パンジーの眼」のブレイン会議が充実し、自信をもって当事者が発信している。 ・ディレクターズクラブが充実し、自分たちの作品を発表している。 ・キャスターやコメンテーターなど、役割を持った当事者が増えている。 ・障害者の権利について自分のことばで語れるようになっている。
	達成度
	・ブレイン会議は、コロナの感染拡大、昨年度のピープルファースト大会、そして今年の出張上映会などの活動が活発になり、開催することができなかった。次年度は、ブレイン会議をどうするか、話し合う必要がある。 ・今年度後半、次年度制作予定の作品について、内容などの話し合いを始めた。次年度中には、完成予定。 ・「出張上映会」開催のため、毎回の放送で「何を伝えたいか」を毎月の当事者会議で話し合うようになった。
地域でふつうにくらす	２０２０年の姿・目標
	・どんなに障害が重くても地域で暮らせることを発信している。 ・当事者の生き生きとした生活を発信している ・『きぼうのつばさ』を見ている人が増えている。 ・『青い空と白い雪がくれたもの』が映画館で上映されている
	達成度
	・強度行動障害を持つ人の入所施設からの地域移行とその後のくらしや、グループホームでくらすのは無理だと言われていた行動障害のある人が、創思苑のグループホームで暮らすまでなどを、ドキュメント映像として作成している。講演や研修だけでなく、大学や図書館でも活用されるようになった。 ・パンジーメディア当事者会議の人たちが中心になって、パンジー内４カ所の上映会だけでなく、外部の出張上映会も始めた。毎回、自分たちは、仲間に何を伝えたいのかを、頭を悩ませながら話し合っている。コロナの緊急事態宣言に伴い、現在は休止している。 ・『青い空と白い雪がくれたもの』の映画館での上映も、コロナの感染拡大の影響で進んでいない。コロナの状況を見ながら、少人数の上映会の開催から始めたい。

	２０２０年の姿・目標
職員を育てる	・メディア担当の職員は、よりよい番組が作れるようになっている。 ・メディアの活動を通じて、より深く当事者を理解する。 ・全職員が何らかのメディアの活動に参加している。
	達成度
	・毎月の「きぼうのつばさ」の発信だけでなく、販売をできる作品が多くなった。「Vimeo」やアマゾンなどでも取り扱っている。 ・「私の歴史」は、みるだけでも当事者を理解するのに役立つが、一緒に「私の歴史」を作るのが、当事者の人生に深く共感をすることにつながっている

一年を振り返って（エピソード・そこから学んだこと）

「私の歴史」に出演する人の幅が広がってきた。今では、文字が読めないだけでなく、言葉が話せない人も出演を希望するようになった。希望者が多いのはうれしいことだが、毎回、その人の歴史をどう表現をしたらいいのか頭を悩ます。

私の歴史の聞き取りは、家族だけでなくこれまで関わった人達から話を聞かせてもらったり、写真や思い出の品を持ってきてもらったり、できる限り多くの情報を集めることから始まる。そして、本人と共に、人生を浮かび上がらせる時間が始まる。この時間が何回か過ぎたころに、「事実」だけを伝えてくれていた人が、「感情を伴った出来事」を話してくれる人に変わる時がある。

「そうなんだ。どうしていいかわからない中で、本人なりに考えて精一杯生きてきたんだ。」と思える瞬間だ。そして、「私の歴史」は出来上がる。

職員はこのプロセスに立ち合うことで、これまでより少しだけ当事者に寄り添える職員に育つ気がする。

上映会年間実績

・外部

日程	依頼先	講演内容
9 月 10 日	(社福)草の根共生会	第 48 回放送きぼうのつばさ
10 月 21 日	(社福)ちいろば会	第 49 回放送きぼうのつばさ
10 月 28 日	(社福)草の根共生会	第 49 回放送きぼうのつばさ
11 月 25 日	(社福)草の根共生会	第 50 回放送きぼうのつばさ
11 月 27 日	(社福)ちいろば会	第 50 回放送きぼうのつばさ

・パンジー内部

毎月１回、各場で担当の当事者とスタッフが上映会を主催した。しかし、１２以降は緊急事態宣言が出たため、各場での上映会となった。

部門	自立ホーム「つばさ」
部門の目指す事	・その人にあった支援を目指しその人らしく生活を送る ・生活にイベントを盛り込み余暇や生活の充実を図る ・安心できる環境と支援者に安心を持てる支援を整える
自分で決める、役割を持つ	２０２０年の姿・目標
	・自分でやりたいこと、決めたことを実現する ・生活の中でその人にあった役割を持ち充実している
	達成度
	・コロナ渦の中、外食や外出など気軽に行くことができなくホーム中心の生活のためやりたいことの実現が難しいことが多かった。 ・当事者が食事をつくり、準備をするなどの役割を持って充実した生活につながるホームがあった。
地域でふつうにくらす	２０２０年の姿・目標
	・１年通してイベントや趣味など充実させ生活を楽しめている ・医療が必要な方も、安心して生活できる環境や支援を継続させる
	達成度
	・誕生日会や月に一度の自由メニューの日など定例になってきた。しかし、コロナの影響もあり、イベント等への参加がむずかしい中で、手探りで当事者の楽しみを見つけられるよう支援を行った。 ・コロナ渦の中、医療と連携しながら入院が必要な方もできる限りバックアップできる体制を進められた反面、面会等ができず、医療との連携が難しいところもあった。
職員を育てる	２０２０年の姿・目標
	・理念に基づいた関わりができている ・当事者の力を信じられる職員を育てる
	達成度
	・理念基づいた研修会等はできなく研修会できなくても理念を理解できる取り組みが必要だった。 ・理念や当事者理解するためにも『グループホームハンドブック』の見直しをはじめた。

一年を振り返って（エピソード・そこから学んだこと）

グループホームで生活している当事者も年々歳を重ね高齢化が進む中、何名かの人が持病等で入院を余儀なくされた。コロナ渦以前は入院時の付き添いや面会にも行くことができたが、コロナ感染予防のため面会や付き添いができず、当事者、職員共に不安な気持ちでいた。

当事者がどのように入院生活を送っているのか、病状はどうなのかが直接わかりにくかった。また、励ましたり、声を掛けたりすることができず、辛かった。

また長引く入院生活の中で、栄養摂取が点滴になり口から食べ物を摂取することができなかった当事者もあった。体力低下、嚥下機能の低下が著しくなり、退院した後の生活でも、食べにくくなってしまった。どうしたら食べやすくなるか、試行錯誤したが、食べる量は減ったままで、体力がどんどん落ちていってしまった。

改めて嚥下機能の低下は、食事を食べる意欲にも影響することが分かった。また食事を取ることの大事さ、食へることはやカロリーを取ることは『生きる』ことにも直結していることも痛感した。

入院や入院後の生活は医療と連携しながら丁寧に進めていく必要があると感じた。

しかし、入院するとどうしても機能低下につながるため、普段の体調管理を丁寧に行い、できるだけ入院しないようにしていきたい。そして、入院したときには、１人１人の入退院後の支援を蓄積し、最善の対応をしていきたいと考えている。

コロナの影響で気軽に電車移動ができず、遠出で外出することが困難になった。

そこで、外出しなくても楽しめることを工夫する必要があり、グループホームの中で余暇を見つける必要があった。

その中で大きかったのは、東大阪市プレミアム商品券だった。普段なかなか食べられないものやゲームを購入したり、日帰り旅行に行った人もあり（幸いにも第３波前だった)、特に障害基礎年金が少ない方には今回の商品券は大きな意味があった。

この使い方については、当事者のニーズを聞きながら世話人が４カ月にかけてプランを考え実戦したことは良い経験になったと感じる。

外出が制限される中、パンジーメディアのキッチンで紹介された料理をグループホームで作ったり、自分のゲームを売ったお金で材料を買ってお菓子を作ったりした当事者もあった。二人で料理をつくり「僕のほうがおいしくできた」など、楽しい雰囲気になっていた。

コロナがなかなか収まらない中、ストレスを溜め込まないために楽しみを見つけていきたい。

また、今後は感染者が出た場合の介護体制、ワクチン接種の支援など、コロナをめぐる支援をしっかり考えていかなければならないと思っている。

当事者の命を守るためにできることをしっかりやっていきたい。